

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	帯谷知可
論文題目	中央アジアにおけるモダニティの追求 —ウズベキスタンにおけるイスラーム・ヴェール問題の歴史的展開と現代—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、中央アジア・イスラーム諸国の中でも重要な位置を占めるウズベキスタンをめぐる、特に「イスラーム・ヴェール問題」を焦点として、ウズベキスタンにおける宗教・社会的な変容を考察したものである。</p> <p>第1章「モダニティ追求の磁場としてのウズベキスタン」では、ウズベキスタンという「国民国家」がいかにかに成立したかを綿密に考証して、独自の「モダニティ」を追求する「磁場」としての対象地域の特性とそこに内包される歴史的な民族的問題群を明らかにしている。特に歴史上の英雄である「ティムール」の再評価と民族的英雄としての表象に焦点を当てて、独立後のナショナリズムがいかにかに表象されてきたかを論究している。</p> <p>第2章「イスラーム・ヴェール問題と中央アジア」では、ウズベキスタンにおける女性の装いといわゆる「ヴェール」の問題を民族誌的な観点から実証的に考察している。特に、19世紀末～20世紀初頭のロシア領トルキスタンのサルト人女性に焦点を当て、彼らの服装の変化とその意義を検討している。</p> <p>第3章「帝政ロシアにおける『ムスリム女性』と『ヴェール』をめぐる言説」では、帝政ロシア期に西欧とは異なる形で展開した「女性解放運動」、それとむすびついた「ムスリム女性」像や「ヴェール」問題がどのようなものであったかを考察している。特に、女性の権利や男女平等論をめぐる、ロシア・オリエンタリズムとムスリム側の知識人の議論と言説を詳細に再構成し、そこに内在しているバイアスを社会・政治的な文脈と結びつけながら分析している。</p> <p>第4章「ソ連期ウズベキスタンにおける女性とイスラーム・ヴェールをめぐる言説と表象」では、ソ連期ウズベキスタンでイスラームとヴェールを「後進的」「抑圧的」とみなす言説と表象がいかにかに展開されたかを、「近代」創出のための「前近代」創出という論点と共に、多くの史資料 (写真・絵画を含む) から多重的な二元論の形成として論究している。ソ連は「ソヴィエト的近代」をウズベキスタンに強制的に押しつけようとしたが、それに対して激しい抵抗も生じたこと、その一方で、第2次世界大戦への動員で多くの男性が前線に送られたために、女性の経済的・社会的自立が実際的に進んだことも明らかにされている。</p> <p>第5章「現代ウズベキスタンにおける『ヴェールの政治学』：ポスト社会主義、権威主義、イスラーム復興の交錯」では、現代ウズベキスタンで「ヴェールの政治</p>			

学」が展開している実相を、脱ソ連期・ポストソ連期における権威主義体制、イスラーム復興の問題などと結びつけながら検討し、女性たちの新しい自己表象としてのヴェールである「ヒジョブ」とそれをめぐる新たなヴェール言説の登場を、現地調査に基づいて考察している。

結論では、ヨーロッパにおけるヴェール問題との差異を明らかにした上で、ウズベキスタンにおけるイスラームとヴェールをめぐる諸問題が、独自のモダニティと独自の女性解放の追求が交錯する場としてのウズベキスタン社会の中で1世紀以上にわたって出現し続け、独立後の今日でも、宗教的・社会的・政治的な変容に対応しながら女性たちのアイデンティティや具体的な服装規範をめぐる思想や言説の対立関係が継続していると総括している。

(論文審査の結果の要旨)

ウズベキスタンは、かつてソ連支配下にあった他のイスラーム諸国と同じように、「民族」の定義とその民族によって形成される共和国の領域がソ連の理論的・政策的な変化によって揺れ動いた歴史的経緯を持ち、さらにソ連以前の帝政期、共産主義が支配したソ連期、ソ連崩壊後の独立期という特異な歴史性を持つことによって、独立後のアイデンティティや宗教・政治関係において他のイスラーム諸地域では見られない特性が生じてきた。

非西洋のアジア・アフリカでは、「モダニティ」が中心的な現代的課題の一つでありつづけているが、旧社会主義圏では西欧の植民地支配を受けた諸地域とは全く異なる「モダニティ」が経験されてきた。それがどのようなものであり、いかなる意味を当該地域において持つのかということは大きな研究課題であり続けているが、本論文は「イスラーム・ヴェール問題」に焦点を当てることによって、それを実証的に論じることに成功している。

本論文の意義として、以下の4点が挙げられる。

第1に、ウズベク語、ロシア語の原典史資料と現地調査のデータを用いた綿密な考察によって、ジェンダー問題をめぐる民族誌的記述においてウズベキスタンに関する豊かな知見を提供し、中央アジア地域研究に大きな貢献をなしている。ポスターなどのヴィジュアル資料も多用して、非常に説得的な議論を展開している点も、高く評価することができる。

第2に、ロシア帝政期から現在のウズベキスタンに至る長期的な視野において「イスラーム・ヴェール問題」を一貫して追究することによって、歴史的な深みを持つ地域研究として、またジェンダー研究として、学術的に優れた寄与をなしている。地域研究においては、現代の諸問題をヴィヴィッドに扱う一方で、歴史的な考察が軽微になることもありうるが、地域の特質を深く考察するためには、歴史性と現代性をうまく結合することが望ましい。その結合において、本論文はきわめて優れた成果を示している。

第3に、イスラームに関する実証的研究としてきわめて興味深い事例を、帝政期・ソ連期・独立期のウズベキスタンの法制、宗教的言説、社会実践などを含めて詳論していることは、他のイスラーム地域との比較を可能ならしめるものであり、広域的・地域相関的なイスラーム世界論にとって大きな貢献となっている。特に「イスラーム・ヴェール問題」は、中東や東南アジアなどのイスラーム諸地域にも見られ、さらに西欧諸国のムスリム移民コミュニティでもしばしば焦点となっており、本論文が提供する視座と知見は、イスラーム世界の中の地域間比較にとって大きな力となるであろう。

第4に、旧ソ連圏のオリエンタリズムの実態の一部を実証的に解明した点が、イスラーム世界論に資する貢献となっている。サイードの『オリエンタリズム』以降、欧米におけるイスラーム研究のバイアスについての学術的知見が蓄積されてきたが、旧ソ連圏については先行研究が不足しており、その点でも貴重な貢献である。さらに、旧ソ連時代のオリエンタリズムに由来する政策が、ナショナリズムを重視する独立後の体制においても相当程度に継承されているという指摘も意義深い。

以上のように本論文は、中央アジア地域研究、イスラーム世界論、ジェンダー研究、ポスト社会主義論などを総合して、原典研究と臨地研究に基づいて大きな成果をあげた優れた研究である。また、イスラーム世界の地域間比較、オリエンタリズム研究にも大きく寄与するものである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年2月14日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。